

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03076

研究課題名(和文) 盛京旗人官僚社会の変化からみた清代洋務運動期マンチュリアにおける歴史的変動

研究課題名(英文) Historical Changes in Qing Manchuria during the Political Reform Movement in the Late 19th Century as Seen from Social Changes of the Manchu Banner Families in Mukden

研究代表者

古市 大輔 (FURUICHI, Daisuke)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40293328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀後半の盛京におけるいくつかの満洲旗人官僚家族の歴史を紐解き、そこに表れた彼らの社会的戦略とその特徴を明らかにすべく作業を進めた。その結果、以下の点が明らかになった。

(1)彼らはその一族の中から科挙合格者・科挙官僚を輩出しつつ、自身の社会的地位を高めようと試み始め、文人家族・科挙官僚家族としての仲間入りを図って盛京で評判の高かった旗人官僚家族や漢人の科挙官僚家族との間に姻戚関係を構築したこと、(2)また、科挙官僚家族として盛京の在地社会に強く関与しつつ、その指導的な役割を担う一族としての社会的地位を確立してゆこうとする意図があったこと、などを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で提示し得た清代後半の盛京における満洲旗人官僚家族の社会的戦略やその特徴の一端から、清代マンチュリアの長期の歴史的変動過程を理解するための端緒が開けたこと、また、内陸中国や西南中国などの「周縁」社会の特質を論じる研究成果に対して、清代マンチュリア史研究の側からも学術的な提起が可能になったことなどが、本研究の学術的意義として挙げられる。

また、本研究で試みた歴史の捉え方は、世界規模での大きなうねり・変化・流動性のなかで日常的にそれへの対応を迫られている現代社会の個人や家族の選択・判断に対しても、小さいながらその参照事例・提言として提示し得る。この点に本研究の社会的意義を認め得る。

研究成果の概要(英文)： In this research, I picked up some historical documents on the Manchu banner families in the late 19th century Mukden, and focused on the characteristics of their social strategies. I have some remarks as follows.

(1)From the late 19th century on, some of the Manchu banner families began to get married with another member of the famous bureaucratic families of Manchu or Han ethnicity in Mukden, and also produced many bureaucrats from their families through the Imperial Examination System in order to raise their status in Mukden society. (2)And, they intended to play a leading part in the regional society as a bureaucratic family or the local elite group in the late 19th century Mukden.

研究分野：中国清代史

キーワード：清代 マンチュリア 盛京 満洲旗人 科挙

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者(古市)は、これまでの研究生活において、清代後期のマンチュリア(特に当該地域南部に位置する盛京)の社会・経済変動とその特色について、19世紀後半にそれへの対応策として断行された清朝の行政改革に注目し、また、18世紀から19世紀後半に至る時期の盛京における清朝の行政的対応の特徴やその歴史的变化についても広く検討してきた。これに加え、清朝による諸改革それ自体のありようだけでなく、清朝がそうした諸改革を断行する際の基礎となっていたであろう、マンチュリアに対する清朝の地域認識とその時期的変化についても併せて検討を進めてきた。

研究代表者によるこうした様々な検討を基礎にしつつ、また、他の研究者による清代マンチュリアの歴史における清朝国家や旗人社会のプレゼンスを重視する研究成果や、20世紀初頭の清最末期における奉天地域社会の形成や地域有力者層の形成過程に関する詳細な研究成果の蓄積の助けも借りながら、研究代表者は近年、洋務運動期のマンチュリアにおける歴史変動と、それを経験した盛京旗人官僚社会とその変化が如何に関わっていたのか、また、その盛京旗人官僚社会は如何なる方法・戦略によってその歴史変動に対応しようとしたのか、さらに、この変動期の盛京旗人官僚社会によるそれへの対応策が、清末以降(特に20世紀初頭の義和団事件以降)のマンチュリアにおける地域有力者層の台頭や地域社会の形成という歴史に如何なる影響を及ぼしたのかといった視点からの再検討を試み始めたところである。

こうした個別具体的な実証的研究の諸成果を踏まえ、マンチュリア南部の盛京(奉天)の旗人社会というミクロな視点から、本研究では、盛京旗人官僚社会とその社会的戦略のありようを詳細に検討し、それによって、20世紀初頭にまで至る、清代を通じたマンチュリア(特に盛京(奉天))の長期的な歴史変動過程を、従来にはなかった新たな視点から理解するための理論の構築を試みることを考えた。これが本研究の学術的な背景と着想である。

### 2. 研究の目的

清朝が洋務運動を推進した19世紀最後の四半世紀の時期は、マンチュリア(旧満洲)が、清朝のための故郷という位置づけから近代中国のなかの「辺境」という位置づけへと次第に転換していく時期であった。本研究は、マンチュリア南部の盛京(奉天)における旗人官僚社会の変化、特に旗人科挙官僚とその家族的ネットワークの構築における変化に注目して、この洋務運動期のマンチュリアにおける歴史変動を解明することを試みるものである。清朝によるマンチュリア統治と盛京出身の旗人官僚社会との間にはいかなる関連性があるのか、この時期に形成された新たな盛京旗人官僚社会がその後の近代マンチュリアの地域社会の形成に如何なる影響を与えたかといった観点から、清代マンチュリアの歴史変動を総合的に論じることを目的とする。

具体的な目的としては、以下の3点が挙げられる。

- (1)19世紀後半のマンチュリアにおける清朝の諸改革や清朝のマンチュリアに対する地域認識といったマクロな側面ではなく、当時のマンチュリアにおける旗人官僚とその社会・家族のありようといったミクロな側面に注目することにより、清代のマンチュリアにおける歴史変動を、より多面的かつ重層的な視点によって総合的に描き出す。
- (2)洋務運動期の盛京旗人官僚の政治活動やその旗人官僚家族の社会的地位の維持・向上のための戦略の変化などを通じ、19世紀後半以降の清朝によるマンチュリア統治とその転換のありようを再検討する。
- (3)この洋務運動期の盛京旗人官僚社会の変化が、清末以降の当該地域における地域有力者層の台頭に如何なる影響を及ぼしたか、という課題を設定し、この時期のマンチュリアの歴史変動がその後の近代満洲の歴史に及ぼした影響について検討することにより、清代マンチュリアの歴史とその特徴を通時的に説明するための有効な理論の構築を模索する。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の順序で作業を進めるものである。

- (1)まず、洋務運動期にマンチュリアで活動した盛京旗人官僚とその社会・家族の歴史を実証的に明らかにするため、盛京出身の旗人官僚とその家族について記された諸史料を博捜し、その官僚の事績やその家族史に関する記事を抽出して史料内容の分析を進め、盛京旗人官僚の社会的戦略の動機やその特徴について検討する。
- (2)次に、その旗人家族と姻戚関係を構築した別の旗人官僚家族・漢人高官家族などに関する記事も上記と同様の諸史料から抽出し、それら家族の歴史についても可能な限りそれを復元する。
- (3)さらに、その盛京旗人官僚家族を中心とする洋務運動期の盛京における様々な人的結合の一端を詳細に描く。
- (4)そして、20世紀初頭以降の奉天における地域有力者層の台頭過程を既存の研究成果や関連諸史料などから再確認しつつ、それらを洋務運動期の盛京旗人官僚家族の社会的戦略とつきあわせることにより、清代から近代に至るマンチュリア史を通時的に再検討するための理論的基礎を構築することを試みる。

### 4. 研究成果

- (1)まず、洋務運動に携わっていた旗人官僚とその家族の一例として、清代後期に高級官僚とし

て活躍した崇實とその出身氏族である完顔氏を採りあげ、その歴史に関連する記事を、主として公刊されている年譜や文集、さらには科挙合格者名簿（同年齒録）などから抽出し、それらの史料の内容分析をおこなった上で、完顔氏のなかの親族関係や、崇實の子弟と婚姻をおこなった一族との姻戚関係とその特徴について論じ、その内容の一端を「崇實の二子とその妻・姻族について 同年齒録にみる清代後期完顔氏の姻戚関係の一齣」と題した文章として発表した。

ここでは、内務府に隷属せず、科挙官僚を次々に輩出するなどして文人官僚家族的な気質を持っていた葉赫那拉氏一族の娘が完顔氏の男子に嫁いだ婚姻事例を紹介したが、この事例に象徴されるように、金の末裔の流れを汲み、清朝の皇室と長年関係の深かった内務府三旗の大族でありながらも、19世紀後半の時期になると麟慶・崇實・崇厚と次々に文人高級官僚を輩出するなど社会的に台頭した八旗の大族としても成長してきた完顔氏一族が、この社会的な台頭を背景に、内務府に隷属していた一族との姻戚関係の構築だけでなく、文学・芸術に造詣の深かった八旗文人官僚一族との姻戚関係の構築も併せて模索していった点を指摘した。

(2)次に、(1)の研究成果に引き続き、それとの比較検討を念頭に、同じく洋務運動に携わっていた盛京出身の旗人官僚とその家族の一例として、清代後期に高級官僚として活躍した文祥とその出身氏族である瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏を採りあげた。具体的には、その家族に関連する記事を、文祥の年譜や文集、さらに、国内外に所蔵されている科挙合格者名簿（同年齒録）などから抜き出し、それらの史料の内容分析を行なった上で、瓜爾佳氏のなかの家族構成や文祥の子女の配偶者となった人物の出身一族との間の姻戚関係とその特徴について論じた。その内容の一端は、「盛京旗人としての文祥と清代後期の瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏 主として『文忠公自訂年譜』・同年齒録からみたその家族構成に関する粗描」と題した文章として発表した。そこでは、盛京旗人官僚の社会的戦略の動機やその特徴についての初歩的な検討も併せておこなった。

ここでは、瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏の姻戚関係の構築のなかにみえる時期的な変化と、それが反映するその家族の社会的地位の変化についていくらかの推測を試みた。文祥の世代までの瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏の姻戚関係の構築事例とは異なり、19世紀後半の文祥の世代になると、瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏の婚姻対象となった家族は「滿洲世家」「漢軍旗人家族」「科挙官僚家族」などの盛京旗人社会ではその社会的地位が比較的高い家族になったが、このことは、19世紀後半の瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏の社会的地位が徐々に上昇し、社会的地位の比較的高い家族のほうに次第に近づいてきていたという状況を示唆していることにはなっていないかと結論づけた。また、瀋陽正紅旗滿洲瓜爾佳氏は、19世紀後半に入って、文祥の進士及第を契機に、旗人科挙官僚家族の一つとして盛京旗人社会のなかでその地位を高め、「滿洲世家」の一つとして台頭し始める状況に至り、同じく「科挙官僚家族」として台頭してきた他の「漢軍旗人家族」や「滿洲世家」との婚姻を通じながら、19世紀後半の盛京旗人社会における文人名族・滿洲大族の一つとなるためのその手がかりをつかもうとしていたのではないかと、という仮説を提示した。

(3)さらに、(2)の研究成果に引き続き、それとの比較検討を念頭に、同じ盛京出身の別の旗人官僚とその家族として、文祥の姻族となった恆泰という官僚とその出身一族である永陵正白旗滿洲喜塔臘氏を採りあげた。具体的には、その家族に関連する記事を、各種地方志のほか、永陵正白旗滿洲喜塔臘氏の族譜、『清實録』や『大清縉紳全書』、さらには、国内外に所蔵されている科挙合格者名簿（同年齒録）などから抜き出し、それら史料の内容分析をおこないつつ、恆泰の出自や経歴、永陵正白旗滿洲喜塔臘氏の家系の基本的性格などを紹介し、そのうえで、永陵正白旗滿洲喜塔臘氏による科挙受験の状況と婚姻を結んだ相手の一族(姻族)の特徴などから、清代後期の永陵正白旗滿洲喜塔臘氏のなかに生じていた変化と、その変化に直面したその一族の対応などに関する検討を試みた。その内容の一端は、「清代後期の永陵正白旗滿洲喜塔臘氏に関する初歩的考察 清代盛京旗人官僚家族史研究のための基礎作業の一環として」と題した文章として発表した。

その結果として、1)永陵正白旗滿洲喜塔臘氏は、清代後期の時点でもなお、「国戚」として代々永陵の守護を担った家系であり、基本的にはその家系的特徴をそのまま維持していくことに重きが置かれていたものの、それに並行して、一族内から科挙合格者・科挙官僚を輩出しつつ、その社会的地位を高めようと試み始めていたこと、また、2)それとともに、文人家族・科挙官僚家族としての仲間入りを試み、地元盛京で評判の高かった旗人官僚家族や漢人の科挙官僚家族などと“門当戸対”の関係を形成しつつ、それら家族集団との間に姻戚関係を構築しようとしていたこと、さらに、3)そうした試みには、永陵正白旗滿洲喜塔臘氏が科挙官僚家族となって盛京の在地社会に強く関与しつつ、その指導的な役割を担う一族としての社会的地位を確立してゆこうとする意図が垣間見えること、などの点を指摘・推測し得た。

(4)最後に、(1)~(3)の研究成果を踏まえ、本研究の総括を試み、それをさらなる研究の進展の基礎とするための作業をおこなった。その内容の一端は、「清代後期滿洲旗人社会のなかの科挙と婚姻 洋務官僚文祥を例に」と題した講演で公表したが、特に(2)(3)の2つの滿洲旗人家族の事例からは、両者がともに、一族内から科挙合格者・科挙官僚を輩出してその社会的

地位を高めようと試み始めるとともに、文人家族・科挙官僚家族としての仲間入りを図るため、盛京で評判の高かった旗人官僚家族や漢人の科挙官僚家族などとの間に姻戚関係を構築しようとしたこと、さらに、科挙官僚家族として盛京の在地社会に強く関与しつつ、その指導的な役割を担う一族としての社会的地位を確立してゆこうとする意図などが示唆・推測された。

以上の研究成果を踏まえ、今後も、盛京旗人官僚家族の一部のなかに生じていたこうした社会的変容が他の集団にもどの程度共有されていたかといった点について引き続きその検討を試みていくとともに、その変容の背景にあった清代マンチュリアの大きな歴史変動との間の関連性や共時性についても、さらに幅広くかつ詳しく検討を加えてゆくつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 11
2. 論文標題 清代後期の永陵正白旗満洲喜塔臘氏に関する初歩的考察 清代盛京旗人官僚家族史研究のための基礎作業の一環として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 10
2. 論文標題 盛京旗人としての文祥と清代後期の瀋陽正紅旗満洲瓜爾佳氏 主として『文文忠公自訂年譜』・同年齒録からみたその家族構成に関する粗描	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古市大輔	4. 巻 9
2. 論文標題 崇實の二子とその妻・姻族について 同年齒録にみる清代後期完顔氏の姻戚関係の一畝	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----